



発刊にあたって

柳津町長 春日源一

多年の懸案でありました柳津町誌を皆さんの手許にお届けできますことは、この上もない喜びでございます。これもひとえに郷土史家大越大雄先生はじめ、編集に従事された方々の御努力と、町民各位のご協力の賜と深く感謝する次第でございます。

ふりかえって見ますに、町誌の編集に着手して十余年になります。時には中断同然の時もあり、あるいは目次の組み立ても数次に及び、又資料蒐集中途において他界された編集委員長もございました。しかし柳津町・西山村の合併二十周年の記念事業の一環として、こうした苦難の道乗り越え、ようやく発刊できましたことは感謝に堪えません。そして、今は亡き方の霊前にこの一本を捧げて御冥福を心からお祈りいたします。

わが柳津町の町民憲章に「文化の町をつくりましょう」を掲げております。ふるさとはは幾多の文化が埋もれております。そうした文化は過去の人々の足跡であり、未来への足がかりであります。この文化を掘りおこし、町誌を出版し、郷土開発の資料として生きるならば、苦節十年の歩みは、輝かしい町づくりにつながることを信じながら、発刊のことばといたします。



編集にあたって

柳津町教育委員会
教育長

内田 伊佐雄

二十年來の懸案であった「柳津町誌」もようやく日の目を見ることがとなったのである。これを考えて見ると一つの仕事の完成には、実際に携った人でなければ味うことのできない苦節の年輪の重みを感じる。しかも地域の隅々まで歩を延ばし、枯葉を取除き、倒れた石仏を揺り起して語りかけなければ郷土の味は出ない。編集にあたられた方々が頭の中でなく、手に触れて感動を呼びおこし書かれた町誌であるところにその価値を見出したい。

郷土のよさはその地域を調査研究し、一つのものにまとめて見てはじめて、真相が理解される。その意味での町誌が、ふるさとを愛し、ふるさとを開拓し、そして未来の生活に大きな意欲を燃やすとき、この町誌は生きると思う。合併二十周年を迎えた今日、それと期を一にして誕生した町誌が柳津町民の心のより所となるとき、第二の価値を見出したい。

生活共同体の基盤は各集落である。その集落の生活探究に大きな頁を裂いて、これに取組み、どちらかといえは見逃し易き集落内の野佛や記念碑に大きな関心を寄せ、心のふるさとにゆさぶりをかけて、この風土に生れた精神的原点に迫るとき、私は第三の価値を見出すであろう。そしていつまでも、ふるさとのよさに触れ、よりよい郷土を造りたい。

終わりに、町誌発刊の仕事に従事された人々の労作に対し心から感謝申上げたい。そしてこの町誌が教育にも、産業振興にも、又新しいコミュニティー造りに生かされるならば、これ等の方々の労作も徒労ではあるまい。